かささぎ 通信 第27号

2014年9月12日 発行

どなたでもいつの会でも参加できます　　森三郎刈谷市民の会　　「森三郎の作品を読む会」

二〇一四年八月の「森三郎の作品を読む会」では、『赤い鳥』一九三三（昭和八）年三月号初出の次の二作品を読みました。（いずれも『森三郎童話選集　夜長物語』所収）

「猿」（森三郎）・「だゝつ子」（筆名　村井安男）

「猿」・・・これは、京の都をはずれた琵琶第というところの、お百姓の家の鮪（しび）という小さな男の子の話です。秋の末のある日、鮪が近くのお公家様のお屋敷の横手にある大きな柿の木に上って柿を食べていると、その家に使われている小舎人（ことねり）たちが、木の上の鮪を見つけて「まるで猿だね。」と嘲笑いました。いつもは負けずにやり返すところなのに鮪は、あちこちつぎあてのしてある短い着物、ほこりにまみれた真っ黒な手足、もう三日もすいてもらっていない髪といった自分の汚い身なりを見まわし、「ほんとにじぶんは猿みたいかしら。」と気弱になります。ある雨上がりの日、川へメダカでもすくいに来たお屋敷のお嬢様に、鮪は自分の取った魚をあげて喜ばれます。「猿だってなんだっていいよ。お嬢様はおれから魚をもらってくれたんだぞ。」と、心の中で、小舎人たちに言いかえしました。

「琵琶第」とはどこでしょうか。「かささぎ通信　第26号」で報告したように、直前の『赤い鳥』昭和八年二月号の「笛」の主人公は、藤原仲平の子どもという設定でした。仲平は女流歌人・伊勢の初恋の相手として有名ですが、琵琶殿を伝領し、琵琶左大臣と呼ばれていた人です。琵琶第という名を使っているのは、それを意識しての森三郎さんの遊びかなと想像しました。また、「鮪」の訓読み「しび」を主人公の名前にしているのも、寺院・仏殿の屋根の大棟の両端に乗っている鴟尾（しび）を連想させますし、木に登っていて「猿」とからかわれたという設定、タイトルの「猿」というつながりにも、作者の遊びが感じられます。

しかし、モチーフは次の「だゝつ子」と同様、身分の違いからくる理不尽に、下の者が耐えている姿で、なかなか重いものです。

「だゝつ子」とは、主人公正男のお父さんが番頭として働く呉服商「井筒屋」の一人息子良さんのことです。二人は同級生で、学校では猫のようにすくんでいる良さんが、正男にはいろいろと無理を言ったりしたりします。でも、正男はお父さんに叱られるとわかっているので、我慢してしきました。ある時、良さんの家で一緒に遊んでいた正男は良さんから、自分がしていないことまで自分のせいにされて家に帰りかけると、お父さんから「正男、何をしたの？」と聞かれます。こらえていた悔しさがこみあげてきて泣き出す正男に、お父さんは「はやく、お帰り、お帰り。」と言うだけです。正男は外に出て、「上着のそでで、涙の目をふきました。」と結んで、この話は終わっています。

「猿」でも、やるせない気持ちで家に戻った鮪が、野良仕事から帰ったばかりの母親に甘えてすがりつくと、母親は「うるさい子だね。しっこいよ。」と手を振りきって、鮪の頬をピシャリとなぐる場面がありました。時代設定は違っても、生活のために一生懸命働いていて、子どもの気持ちをくみ取る余裕のない親、自分で現在の理不尽な状況に立ち向かうしかない子どもという構造は同じでした。寂しさと救いようのない空しさが読後に残りました。

その時、集まった「作品を読む会」の会員の一人から『赤い鳥』の読者層は、どのような人ですか？」という質問が出ました。教室で先生に読んでもらったり、個人で購読できるのは経済的余裕のある層の子どもたちだろうと考えられます。「森三郎さんは、余裕のある立場の人に、しいたげられる側の痛みをわかってほしいという思いがあったのではないでしょうか。」というその会員の言葉に、皆ほっとしました。

○ 次回予定　10月10日（金）午後1時～3時

『赤い鳥』昭和8年4月号初出作品

「馬方八五郎」（『森三郎童話選集　かささぎ物語』所収）

「けんかの後」（『森三郎童話選集　夜長物語』所収）